It's KONAN Style スタイル

さまざまな分野の
第一線で活躍する卒業生

「アメリカに行きたい」その気持ちだけで渡米し、俳優になる夢を実現 たった一人、ゼロからつかんだ今の充実

合田さんが俳優に憧れたのは、幼いころ家族と一緒によく観ていた洋画の影響だったといいます。俳優になる夢を抱き、大学時代から芝居を始め、縁あって声優プロダクションに所属。キャスターやラジオDJとして番組にレギュラー出演するなど、声の仕事が増えつつあった中、それらを手放し、単身で渡米。現在はニューヨークで俳優、声優として活躍中です。2019年には映画で主演女優賞を受賞。異国の地で夢をかたちにした、その道のりを語っていただきました。

PROFILE

俳優・声優 合田（ごうだ） 沙おり（さ）さん

2007年、文学部英語英米文学科卒業。俳優になるため、大学入学と同時に劇団に入団し、舞台演劇、時代劇、映像、ミュージカルなど芝居経験を積む。声優プロダクションにも所属し、声優、ナレーター、MCとしても活動。2009年に単身渡米し、以降、米国で数々の映画、TVに出演。主演した映画『MY DAUGHTER YOSHIKO』では多くの映画祭で主演女優賞など3賞を受賞。

映画『MY DAUGHTER YOSHIKO』ポスター

「行ったらいいやん」その一言で渡米。そこは夢をまっすぐ追える国だった

俳優、声優という夢をかなえ、現在アメリカで活躍する合田さん。渡米にあたり、相当の覚悟や計画があったかというと、実はそうではないらしい。きっかけは、DJとして日本とアメリカを行き来する友人に、ニューヨークに住むことへの憧れを口にしたこと。一言、「行きたいなら行ったらいいやん」と返されたのだ。シンプルなその考えに妙に納得し、渡米を決意。約15年たった現在、たまの帰省以外は日本に帰ることなく、ニューヨークに住み続ける。

渡米するまでの合田さんは劇団で芝居をし、縁あって声優プロダクションに所属。渡米を決めたころは司会やナレーター、レポーターなど声の仕事が増え始めていた。一方で、周りの目も気になっていたという。「一般的な会社員のように同じ時間に出勤することもなく、収入も不安定。ましてや本当は俳優になりたいだなんて、人からどう思われているだろう」と。声の仕事は好きで、やりがいもあった。しかし、俳優になる夢をひたむきに追いかけていたはずが、いつの間にか、かなわぬ夢のようにとらえていた。

『MY DAUGHTER YOSHIKO』撮影現場

単身渡米した2009年春。降り立ったニューヨークはエネルギーにあふれていた。誰もが自分のやりたいことを思うがままにできる街。「ここなら俳優になる夢をまっすぐ追いかけられる」。当初は1年間だけのつもりだった滞在期間だが、すぐに延長を決めた。

「この国で俳優として生きる」その決意で、話せなかった英語もアメリカ式の演技も勉強

当初は英語での生活にも慣れず、現地に知り合いもいない状況だった。シェアハウスに住まいを確保し、生活費を稼ぐためアルバイトで寿司屋の受付を始めた。英語が聞き取れず予約を間違え、お客さまを怒らせて泣いたこともあったという。それでもがんばってこれた理由は、俳優としてのチャンスの多さだ。ハリウッド映画など大きな作品のオーディションを受けるために、日本なら大手プロダクションに所属する必要がある。しかし、アメリカでは、広く一般公募することも少なくない。それに、俳優の仕事もニューヨークの街も好きだという気持ちが大きく、決意は変わらなかった。アメリカで俳優をするには語学が必須なため、苦手なアクセントを克服するためのレッスンや、アメリカ式の演技を身につけるために演技の学校に複数通った。どんなに辛くてもまっすぐ夢を追いかけた。

世界各国の映画祭で主演女優賞を受賞 さらなる自信や喜びに

日本にいたころは、「俳優になる夢がかなえば人生は成功」と思っていたという。しかし、大学でゼミの先生が語った「仕事とプライベートは相乗効果になる。どちらも充実したら人生はもっと楽しい」ということばに、人生観が変わった。アメリカで結婚と出産を経験し、仕事も充実してきた今、先生のことばを実感する。舞台やCM、TVなどの仕事が増え、映画『MY DAUGHTER YOSHIKO』では、インドやニューヨークなど、世界の映画祭で主演女優賞をはじめさまざまな賞を受賞した。この映画で合田さんが演じたのは自閉症児の母親役。自身が子育てを経験する中で息子を思う心がそのまま役に生きた。受賞を振り返り、「私の演技に感動してくれた人がいることがうれしかったし、今までやってきたことが間違っていなかったと思えました」。仕事とプライベートが結実した、合田さんの代表作だ。

映画『COMPULSION』ポスター

『COMPULSION』のワンシーンと撮影前の一コマ

渡米に計画や理由はいらない 行きたいと思った気持ちを大事にしてほしい

かつては仕事が途切れた時期もあり落ち込むこともあったという。でも「常にハッピーでいることが大事だとわかりました。旅行や遊びでもいい。アクティブに楽しんでいると、そのエネルギーに仕事が舞い込んでくるんです。そしてオファーがあったら仕事や人に丁寧に向き合うことも大事」と合田さん。シビアな個人主義だと思われがちなアメリカだが、一方で人との関係性や人柄を大切にする国だ。現在の合田さんの仕事も元をたどれば、渡米後すぐの司会の仕事が始まりだった。そこからナレーターや声優の仕事が広がり、現在の俳優プロダクションへとつながって、約15年。ただ、アメリカで司会に挑戦できたのは、日本で声の勉強をしてプロとしての実績を積んでいたからであり、オフ・ブロードウェイでの時代劇に抜擢されたのも、時代劇を学び、劇団で経験を積んでいたから。日本でがんばってきたすべてのことが、アメリカでの力になった。「いつかTVドラマシリーズにレギュラー出演したい」と今も夢をまっすぐ追い続ける。ボーダレスが進む時代に、海外での活躍を望む人が増える中、もし渡米を考えているなら行動したほうが良いと語る。「綿密な計画などなくても、行きたい気持ちを大事にしてほしい。たとえすぐに帰国することになったとしても、その経験はきっとプラスになるはず」と背中を押す。苦労も成功も経験した合田さんのことばは力強い。